

R. 1930. Embryogénie des Begoniacées. Développement de l'embryon chez le *Begonia semperflorens*. C.R. Acad. Sci. Paris 208: 1338-1340. Swamy, B. G. L. & N. Parameswaran 1960. A contribution to the embryology of *Begonia crenata*. J. Indian Bot. Soc. 39: 140-148.

\* \* \* \*

*Begonia metallica* と *B. Roxburghii* の花粉と胚珠の形成を調べた。両種とも同じである。花粉形成は tetrahedral and decussate type であり、タペータムは secretory type である。花粉は 2 核の時期に放出される。胚珠は倒生で 2 枚の珠皮があり、胚嚢のまわりに endothelium が作られる。胚嚢形成は Polygonum type である。胚嚢形成までは行いが胚珠は殆んどが退化してしまう。したがってこの 2 種は種子を作らない。増殖は栄養繁殖による。

□譚 沛祥：華南杜鵑花誌 (Tam Pui-cheung: A survey of genus *Rhododendron* in South China). 119 pp., 色彩図 4, カラー写真 2, 線画 38. 香港広宇出版社. 1983. ¥4,000. 中国南部の広東・広西・福建・湖南・江西の五省に分布するツツジ属の総説である。120種, 14変種が集録されている。このうち半分の 51 種が新種とされ, 18種は新分布のもので, 従来この地域に32種しか知られていなかったというから, 種類の再検討を経なければならぬとしても, 著しく解明されたわけである。華南植物研究所の標本をもとにし, その他に広西植物研究所, 廬山植物研究所など, 華南にある 6 標本室所蔵の標本の調査でまとめられたものである。中国語による検索と詳細な種の記載, 標本の引用があり, 後半に英文による検索, ラテン文による新種や新変種の記載がある。中国のツツジ属の本格的な基礎研究である。

ツツジ属の研究は数多く, 最近もヨーロッパから日本や中国のツツジ属をまとめた論文がだされている。しかし, その報告の日本の部分を見るかぎり, 実体とはかなりかけはなれたまとめかたをしている。中国のツツジ属についてもやはり同じ扱いが見られるのではないかと想像される。現地での豊富な資料のもとに研究が行なわれないと本当のことはわからない典型的な例を示している。

雲南, 四川はシャクナゲ類の宝庫である。中国で本書のような基礎的な研究がまとめられたことは, いずれこの地域の現地の研究者によって本格的な研究がまとめられるであろうことを思わせ, その豪華さが今から期待される。 (山崎 敬)